

1. ポスト・インペリアリズム

1.1 なにがマルクス経済学を今日のすがたに導いたのか？

一般にマルクス経済学は、『資本論』体系に示されたマルクス自身の学説を発展させたものといっていよい。ただ、今日のマルクス経済学固有の性格は、マルクスの没後、後発資本主義の台頭に伴う大規模な資本主義の地殻変動によって決定づけられたものである。自由主義段階から帝国主義段階への移行に際し、マルクス以降のマルクス経済学者たちは『資本論』を基礎にしながら、国家や共同体、制度や慣習、イデオロギーや宗教・文化といった、非市場的な諸要因が市場に及ぼす影響に注目し、さまざまな理論化の試みを展開した。現実には競争現象が退潮するなかで19世紀のポリティカル・エコノミーを市場経済一般の理論として形式化し、自然科学と比肩できる地位に高めようとしたエコノミックスの流れに対して、資本主義の歴史的現実を直視し、その特殊な性格の解明に向け、総合的な社会科学の一環として経済学を位置づける流れが生みだされた。ここに、今日のポリティカル・エコノミーとしてのマルクス経済学のアイデンティティは確立されたのである。

1.2 帝国主義段階における資本主義の特質はどこにあるのか？

ひと言でいえば、資本主義がかかえる〈部分性〉の認識にある。帝国主義段階への移行は、資本主義が遅速の差はあれ、同型のまま自己拡張するものではなく、資本主義化の途は日本を終端に閉ざされていることを示した。資本主義本国と植民地との断絶が鮮明となると同時に、資本主義諸国の間にも鋭い対立関係が生みだされていった。対外的に資本主義的關係が抑制され旧来の支配關係が温存・補強されるとともに、内部的にも国家的な政策介入や労資協調を通じた制度的調整が強化される等、非市場的な要因が増大し、自由主義段階とは逆転した諸現象が顕著となった。こうした諸現象の解明には、市場の原理で説明可能な領域を、資本主義の変容や対立類型への分極化に密接に関連した歴史的、文化的な諸要因を解明する領域から区別し、資本主義の原理論として構築する作業が不可欠となる。〈非〉市場的な諸要因は、市場的要因を基準にとりあえず否定形で規定するほかない。こうして原理論を基礎としながら、多元的な社会的諸要因を関連づけてゆく総合的観点が20世紀のマルクス経済学特徴となった。近似面や予測可能性に有効性を求めるエコノミックスの経済理論とは異なり、マルクス経済学の原理論はむしろ現実の資本主義との乖離を明確にし、その歴史的位相や対立的な類型を捉える基準として発展したのである。

1.3 グローバリズムはいかなる意味でポスト・インペリアリズムなのか？

私自身は、帝国主義の明確な対を含意するのでなければ、あえてグローバリ

ズムという必要はないと考えている。ここでは、今日の資本主義が帝国主義段階の〈部分性〉から離反していることを指示するラベルにこの新語を借用することにする。それには二重の意味がある。第一にあげるべきは、東アジアから南アジアにかけての地域で典型的に観察される、新たな資本主義の勃興であり、とりわけ中国の「市場経済」的な発展は決定的である。第二に、先進資本主義諸国の内部においても、従来市場の外縁で処理されてきた、科学的知識や生産技術、技能養成や組織管理などが新たなかたちで資本の利潤追求活動の中心に組み込まれる一方、医療、介護、保育、教育などの諸局面に市場的競争がもちこまれ、社会的生活を支える制度や慣行が解体・再編され、宗教的・文化的価値やイデオロギーの激しい動揺・対立を生みだしている。それは外面的グローバリズムに対応した内面的グローバリズムといってよい。この二重の地殻変動のもとで、原理論はその現実への適用方法と理論の展開方法との両面で再考を迫られている。

2. 変容論としての原理論

2.1 グローバリズムは原理論にどのような反省を迫っているのか？

これまで原理論は、帝国主義段階を特徴づける〈部分性〉、その結果生まれる資本主義の対立的な多様性をどのように捉えてきたのか、ふり返ってみると、その核心をなしてきたのは類型論的アプローチとでもいうべき方法だったように思われる。労働力の商品化等、資本主義であるかぎり不変な条件を前提に、あとは市場的な要因だけで説明できる資本主義像を再構成し、それを基準に現実の資本主義を構成する非市場的な要因を割りだし整理する方法である。現実の資本主義は、市場的な要因と非市場的な要因との混合経済とみなされ、その多様性はもっぱら非市場的な要因の側の組合せで説明されてきた。

このアプローチは、資本主義とは何かという問いに、単一の資本主義像をもって答えようとしたことになる。『資本論』の場合、資本主義の発展が現実には単一の資本主義像に次第に接近するとみる収斂説が濃厚であった。それは同時に、内的な矛盾の累積によって資本主義は自己崩壊するという認識と表裏の関係にある。これに対して類型論的アプローチは、資本主義の歴史が定向的発展に還元できないという事実を理論化する方法を確立したが、資本主義像の単一性に関してはそれをさらに徹底する結果となった。資本主義は本来斯くあらんという原理像を基準に、現実がどこまでそこから乖離したかという遠近で歴史的な位置づけを与え、どの部分がどれだけはみ出しているかというブレで多様性も捉えられた。そのなかで資本主義の自己崩壊説も、帝国主義段階を本来のすがたから逸脱した資本主義の没落期と規定するかたちに変換されて継承されたのである。

では、グローバリズムのもとでは類型論的アプローチのどこが難点となるのか。それは単一の資本主義像によるかぎり、二重のグローバリズムが生みだす多様性に固有な性格が識別困難となるところにある。単一像を基準にすると、グローバリズムは従来からの逸脱の累積・延長か、あるいは逆に原理像への回帰・再接近か、いずれかにしかみえない。それはポスト・インペリアル리즘の多様性を分析する装置としては障害をかかえているのである。グローバリズムを単純な再収斂過程でないとみるならば、これまでの原理論の基底をなす単一の資本主義像から再検討しなおす必要があるわけである。

2.2 グローバリズムにおける多様性の特徴はどのように捉えたらよいのか？

<非>帝国主義がただちに資本主義の多様性の否定にならないためには、どのような方法で原理論を展開し現実と関連づけていったらよいのか。その多様性の本質に迫るには、変容論的アプローチとでもいうべき新たな方法が必要なのではないかと考える。それは、市場的な要因と非市場的な要因との作用・反作用を通じて、資本主義自体がその様相を変える性質を本源に具えている点に着目し、資本主義の多様性をこの変容の結果として内在的に説明する方法である。資本主義が示す異なる様相を、不変の原理像に不純な非市場的要因が付加した結果として、原理論の外部で整理して示すのではなく、多様性自体の類型を識別する手段として原理論を読み替えてゆくのである。帝国主義段階と区別される、グローバリズム固有の多様性の解明は、このような方法論的な転換めきには達成できないであろう。

2.3 多様性の類型化は、原理論にどのような見直しを求めるのか？

変容論的アプローチでポイントとなるのは、原理論における外的条件の処理方法である。資本主義は市場を通じて社会的再生産を編成する社会であるが、市場だけでは処理ができない開口部をいくつか残している。この規定的な開口部をどのような非市場的要因で充填するかによって、資本主義の様相も大きく異なってくる。開口部における部分的変化が全体の構造を変容させると考えるのである。

では、実際にはどのようにしたらよいのか。試みに、資本主義にとって、次のものはどこまで必然的なのか、問うてみるとよい。たとえば、金貨幣は資本主義にとってどこまで不可避なものか、機械制大工業は、単純労働は、個人資本家は、単一発券銀行は、近代的土地所有は、あるいは激発性恐慌や周期的景気循環はどうか、等々。原理論では、労働力の商品化といった、資本主義であるかぎり変わらぬ一般的条件のみが前提されているだけではない。原理論は、たしかにこの一般的条件にもとづいて資本主義が資本主義であるかぎり変わらぬ岩盤の存在を示すが、同時に資本主義において必ず斯くしなければならぬ

とは言い難い外的条件をも前提している。それはある段階の事実であるがゆえに、あるいは理論構成を簡単にするために特定化される面がある。この外的条件は変更可能な要因であり、原理論はその変更が全体の構造にどう影響するかを推論する手段となるし、必要ならそうできるように再構築すべきなのである。事実、貨幣や労働をめぐるのは、従来からさまざまなかたちで原理的拡充がはかられてきた。こうした例に即してもう少し詳しく報告する。

3. 市場の原理と資本の論理

3.1 グローバリズムは資本主義の収斂性を意味するものなのか？

「市場の原理」という表現がいろいろな場で使われ、グローバリズムのもとでは資本主の一様性が一方的に深化するかのように論じられる。これに対して変容論的な資本主義像は、資本主義の表層における市場の合理性の拡充が、同時に深層における非市場的な要因の新たな充填を要請するかたちで、いわば市場の原理による同質化と資本の論理による多元化という逆走的な二重運動の存在を浮き彫りにする。市場が覆う領域が拡大すればするほど、その限界を補完する国家、制度、イデオロギー等の役割も同時に強化されるのであり、そこに資本主義の新たな多元化が生みだされてゆくのである。

3.2 ネオ・アナキズムにどう向き合うのか？

資本主義の収斂＝内部崩壊論とも、また不純化＝没落論とも一線を画する変容論的アプローチは、資本なき市場の可能性を主張し、等価交換による公正な市場を理念化し、それを保証する貨幣・信用制度の改革を模索する市場社会主義的なアナキズムに近似してみえるかもしれない。マルクスがこれに対して加えたイデオロギー批判を吟味し、今日さまざまなかたちで提唱される資本主義の代替理論との距離を確定しておきたい。

3.3 グローバリズムは原理論をどこに導くのか？

資本主義は市場の原理だけでは処理できない開口部を残し、外的条件を分解・再編する変成作用をもつ。この作用に着目することで変容論的アプローチは今日、総合的な社会科学を再建する途を拓く。マルクス経済学自体の主題はこのような客観的分析に限定されるが、代替理論との対峙はさらに、社会哲学的な、よりひろい観点からの再評価をも不可欠なものとしている。